紅い館の〇〇メイド

DXM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紅い館の〇〇メイド

【Ｎコード】
Ｎ６２２６Ｗ

【作者名】
ＤＸＭ

【あらすじ】
家が火事になった。なら紅魔館で働けばいいじゃない。

のっとめいど（前書き）

この作品は原作設定をあまり重視していません。

東方ｐｒｏｊｅｃｔの設定で物語りに不都合な点があれば改変しますので、そういったことが許せない方はブラウザバックを。

のっとめいど

紅い霧が幻想郷を覆った異変から数ヶ月。
そろそろ冬に入るかという時期に、私は紅い霧の異変を起こしたと言われている吸血鬼が住まう紅い館にやってきていた。
能力持ちとは言え、ただの人間に過ぎない私が、何故吸血鬼の館に来ているかといえば、それは極有り触れた理由だ。

就職。

私も今年で十六。寺子屋を卒業し、だらだらと家庭菜園を作って四年ほど暮らしていたのだが、ただ先月問題が起きたのだ。
家が火事。全焼。服もなく、財産もなく、そして仕事もなくなった。
私の自慢の家庭菜園も紅蓮の炎で焼け死に（栄養分はたっぷり残っていそうだが。焼畑農業ってそんな感じだと思う。俄か知識だけど）、家で営んでいた雑貨屋も商品が全てなくなった。
人里の皆さん及びせんせーからの援助で一家四人飢えて死ぬようなことはなかったが、一刻も早く立ち直らなければならない。
家の建て直し、借金及び商品の入荷、援助金の断り（借金するのに援助金受け取るのはねぇ）、更に食い扶持の確保。
両親だけが働いて何とかなる状態ではあるが、しかし私も働いたほうが立ち直りは速いだろう。
そんなわけで、来るもの拒まず去るもの追わずというのが噂になっている紅い館に来ているのだ。
ここの、めいど長さんは雑貨品……主に銀製の刃物などを買っていくことが多かったから、少しだけ面識がある。あっちが覚えているかは知らないけれど。
さて、そろそろ居眠りをしている門番さんに声をかけてみよう。

いきなり来たものだから今日は無理かもしれないけれど。
「あの～」
ちゃいな服を着ている女の人の方を揺さぶり、起床を促す。全然床についてないけど。
「はいっ！　居眠りなんてしませんよ、全然！　ええ、してませんとも！」
流石に苦しいと思うのだけど。
見れば分かるし。あとよだれ。よだれ垂れてる。
「あ……？　咲夜さんじゃない？」
「あの、私ここで働きたいんですけど」
よだれを拭きながらこちらを見据える女の人に、単刀直入に言ってみる。
「働く……ですか？」
「はい」
「……ここでですか？」
「ここでです」
そう答えると、女の人は信じられないといった表情になる。
何かいけなかったのだろうか？
「あの、何かいけなかったのでしょうか？」
「あ、いえいえ。そういう訳ではなく、少し驚いたもので。吸血鬼の住まう館で働きたいなんて人は初めて見ましたから」
あー……確かに珍しいんだろう。吸血鬼（に限った事ではないが）は人に害を及ぼすと言われている。この館の吸血鬼はそんなことしないらしいけど。でも、人間にとっては畏怖の象徴であることに変わりない。
確かに、吸血鬼は怖い。しかし、しかしだ。怖いからといって働かなければ、家族に迷惑をかけるのだ。それだけは避けたい。
四年間も家で仕事の手伝いもせず寄生虫のように暮らしていたんだから。
「えと、それで私はどうすれば……」

「ん～そうですね。ちょっと上司を呼んできますので、そちらに話を聞いてもらってもいいですか？　何分、私では雇う雇わないを決める権限はありませんから」
「はい、分かりました」
「では。っと、その格好で待っててもらうのは忍びないですね」
女の人はそういうと、何処からともなく厚手の上着を取り出した。
そしてそれを手渡してくれる。
「それ着て、待っていてください」
「でも」
「いいんですよ。遠慮しなくても」
そこまで言うと女の人は館の中に入っていった。
……そんなに寒そうな格好をしていただろうか？　薄手のしゃつとずぼんでも意外と暖かいものだけど。
ま、いいや。とりあえず厚意には甘えておこう。見た目どおりに暖かそうだし。

どれくらい経ったか。
館の周りを遊びながら警護していた妖精をぼんやりと見ながら、私は門に背もたれていた。
妖精は実に楽しそうである。
子供くらいの大きさから、手の平サイズまで。皆それぞれが笑顔で遊んでいる。
妖精は群れを作らないと聞いたことがあるが……仕事仲間や友人は作れるみたいだ。ちょっと驚き。
「お待たせしました」
不意に頭上から声が聞こえた。
先ほどの女の人とはまた違った声。
慌てて立ち上がり、声のしたほうを向くと、そこにはめいど服を

着た銀髪の女性がいた。
少し高めの身長、蒼い瞳、顔の両サイドには三つ編みが下げられている。
黒いわんぴーすに、白いえぷろんどれすを着けている。すかーとはかなり短く、下手をすれば下着が見えてしまうんじゃないだろうか。
この人こそ、我が雑貨屋に度々訪れていためいど長さんである。
「あら、貴方は雑貨屋の……」
「は、はい。夜空天満（よぞらてんま）です」
少しばかり緊張してどもってしまった。悪印象を与えてなければいいけど……。
「私は十六夜咲夜。紅魔館で働きたいそうだけど……本当かしら？」
「はい」
「そう、ならついてきて。ここで働くに値するか見定めるから」
見定める……面接試験ということだろうか？
四年前に寺子屋でそんな試験が聞いたことがある。というか、練習もしたけれど。
えっと、ハッキリと喋って、自分の考えをしっかりと伝えて、分からないことには分かりませんって正直に言うんだよね。
……よし、大丈夫。私ならやれる。

内装までもが紅い館のある一室。
そこで私は十六夜さんと机を挟んで向かい合いながら座っていた。
貸してもらった上着は、既に返却してある。
「まず、年齢を教えてくれるかしら」
「十五です。今年十六になります」
私は十二月の三日生まれだ。

一、二、三と並んでいるのが特徴。
「では、能力の有無」
「『浄化する程度の能力』と『珍しいものを拾う程度の能力』を持っています」
浄化とは、身体の中の毒素を無害なものにしたり、猛毒などを解毒したりする能力だそうだ。
もっとも、私の力不足で、効果範囲は自分自身のみらしいけど。
何故語尾が伝聞形なのかというと、私もせんせーに聞いたからに過ぎない。
もう一つの珍しいものを拾うというのも、そのまんまだ。
金属だったり、小銭だったり。または外の世界から流れ着いた道具だったり。
加工できそうなものは家で加工し商品に。出来そうにないものは香霖堂というところに売りに行ってもらう。
「珍しいわね。能力が二つもあるなんて」
「よく言われます」
能力は基本的に一人一つ。更に言えば、特別な人間や妖怪でもない限り能力を持つことがない。
私の何が特別なのか全く分からないが、しかし能力を持っているということは何か秀でていることがあるのだろう。自分ではよく分からないけれど。
「次、料理の腕は？　掃除や洗濯とかも出来るかしら？」
「料理は、母親仕込みの家庭料理なら。掃除は大の得意……ですが、このような洋館は初めてですので、少し不安があります。洗濯も同様です」
はて。今更だが敬語はこれでいいのだろうか？　下手な敬語は返って知性を疑わせるというが……。
まぁ、ここまで来てしまったのだ。後には引けまい。
「そう……。訓練すれば、あるいは……。じゃあ、次。特技は？」
「裁縫です。自宅では服の解れなどを直していました」

正確には直させられた。
まぁ、暇つぶしになったから良かったけど。
「次は……これが最後ね。貴方はどうして、この館で働こうと思ったのかしら？」
どうしてって。
正直に言ってしまえば、住み込みのこの館で働いてくれと懇願されたからだ。両親に。
食い扶持が減って金が入るなら万々歳ということらしい。
私としても、力仕事はまず出来ないし、甘味どころやうどん屋の従業員は向いていない気がした。細工屋は、美的感覚が手のつけられないほど酷い私が働いても邪魔になるだけであろう。雑貨屋は、私の家の他にもあるのだが、そこは働き手をそこまで必要としていない。
よって、両親が何処からか聞いてきたこの館の噂話……つまるところ来るもの拒まず去るもの追わずが私にとって程よい仕事だったためにここに来たのだ。
「あー、いや。質問を変えるわ。貴方は悪魔のすむこの館で、働く覚悟があるのかしら？」
正直に話すと、十六夜さんは真面目な顔でそう聞いてきた。
正直言って、吸血鬼は怖い。血を吸われて自分も吸血鬼になってしまうかもしれないし。
しかし、だからといって働かない訳にもいかない。怖いという個人の感情で、困っている家族を助けられないのは、私が嫌なのだ。
そんな建前は置いておいて私はこう答えた。
「給金が、貰えるのなら」
……いや、本当に。私は給金が貰えるのなら何処でだって働いてやるよ。働かせていただきますよ。
「給金？」
「はい」
十六夜さんは目を瞬かせる。

そして、プッと少し吹き出した。
何かおかしなことでも言っただろうか？
「いや、ごめんなさいね。今までそんなこと言った人間はいなかったものだから……ク、クク」
つぼにでも嵌ったのか、笑いを堪える十六夜さん。
ふぅむ。かなりおかしなことを言ってしまったみたいだ。
「ク、クク。合格よ、合格。まぁ、妖精メイドよりは役に立ちそうだったから最初から雇うつもりだったけど。あー……久しぶりに笑ったわね」
おお、何故かは分からないが雇ってもらえたようだ。
「あ、でも少し問題があるわね……付いてきてくれるかしら」
「分かりました」
問題。なんだろう。そういえば吸血鬼が住んでるんだよね。
それは、確かに問題になるだろうなぁ。
もう、人間からしても吸血鬼からしても『馬鹿だろ』と罵倒されるようなことをしてるんだよね、私……。
しかしこれも給金の為。やるしかないのだよ。
「道すがら、仕事の説明をしておくわ」
「はい」
「制服は貸与、食事は三食つき。昼寝休日有給はなしよ」
「分かりました」
昼寝はともかく、休日有給なしか……。結構辛いかもしれない。
「その分、給金はしっかり払うから安心しなさい」
「ええ。貰わなきゃ仕事しませんよ」
「そうなったらクビにするだけね」
「あわわわ。勘弁してください」
給金が貰えないと私は……私は……！
ま、まぁしっかり働けばいいだけだよね。そうだよね。
「それで、貴方にやってもらうのは主に掃除ね。洗濯は洗い方が特殊なものとかあるし、料理は西洋料理は作ったことがないでしょ？」

「はい。ぱすたくらいですね……」
せんせーに教えられて、ついでに材料も貰ったから作ってみたことがある。
塩湯でして、別に作ったそーすと絡めるだけだったから意外と簡単だった。お手軽料理。
もっとも、私が作ったのは一番簡単なもので、難しいのは他にあるらしいのだけど。
「それと、館内にいる妖精メイドたちの統括ね。少しずつでいいから、指示を出せるようになりなさい」
「はい。分かりました」
「それと……。そうそう。お嬢様のところに行く前に着替えなきゃね」
着替え……。十六夜さんの着ているめいど服とやらだろうか？
洋服はあまり着たことがないから、まさしく未知の領域。
「こっちに来て、採寸するから」
「はい」
とある部屋に連れて行かれ、そしてめじゃーと呼ばれるものを取り出す十六夜さん。
「脱いでくれるかしら？」
「えっと、全部ですか？」
「下着姿になってくれればいいわ」
流石に全裸ではなかった。
言われたとおりに下着姿となる。今身に着けているのはぶらじゃーとしょーつだけ。
胸は小さいから、下着は要らないような気がするのだが……。母さんに着用を義務付けられたのでしょうがなく着けている。
十六夜さんは慣れた手つきで、胸囲、腹囲など、俗に言うすりーさいずを図って行く。
何だか少し恥ずかしい。
「大体平均ってところかしら。身長は私より頭一つ分小さいくらい

だから……。これくらいかしら」
十六夜さんの姿が一瞬掻き消え、次の瞬間にはめいど服を手に持っていた。
瞬間移動と言うものだろうか？　そういえばこの間見かけた博麗の巫女が同じようなことをやっていたなぁ。
「着てみて」
「ええと、どうやって着れば……？」
十六夜さんの手を借りて何とかめいど服を着る。
さいずはピッタリなのだが、どうにも着られている感が拭えない。
「あ、すかーとが長い……」
私と十六夜さんの服を見比べると、私の方がすかーとの丈が長い。くるぶし辺りまである。
対して十六夜さんのものは、太もも辺りまで。膝の少し上くらいだ。
「私のが短いのよ。こちらの方が、動きやすいからね」
確かに。長いより短い方が動きやすそうだ。下着が見えてしまいそうだが。
「さ、行きましょうか。気づいているだろうけど、お嬢様に会ってもらうわ」
「お嬢様、ですか？」
「そう。永遠に紅い幼き月。レミリア・スカーレット様よ」

部屋に入った瞬間、呑み込まれた。
ただの小娘である私にも、それくらいは理解できた。
色素の薄い髪、桃色を基調とした服、身長は低く、まるで十にも満たない子供のようだ。
しかし。背中にある身長よりも大きな蝙蝠の羽が人間ではないことを如実に語っている。

吸血鬼。
以前拾った外の世界の本では、化物、怪物、人外、夜族、物の怪、異形、不死の王とも記述されていた。
それらを読んだときも思ったが、これは格が……いや、最早存在している次元が違う。
彼女は私よりも、上の次元にいる。
何て、圧倒的。
「ソレが、新しいメイド？」
「はい。見習いですが」
凄い。
思わず尊敬の言葉が小さく漏れる。
十六夜さんは、こんな規格外な存在を前にして、臆することなく話していられる。
それが、従者。それが、めいど。それくらい出来なければ、やっていけないのか。
「ふぅん？　なるほどね。ククク、面白そうじゃない。いいわ、面倒を見てやりなさい」
「はい。お嬢様」
「……ああ。いいこと思いついた。咲夜、ある程度使えるようになったらフランの専属メイドにしなさい」
「それは……」
「命令よ。ある程度使えるようになってからでいいわ」
「……分かりました」
えっと、何？　どういうこと？　何の話？
呆気に取られすぎて何を話していたのかさっぱり聞いていなかったんだけど……。
「貴女、名前は？」
「あ、えっと、夜空天満といいます」
「そう。私はレミリア・スカーレット。この紅魔館の現当主で、貴女の雇い主……つまりは主人になるわ」

そしてにっこりと、誰もが見惚れるような笑顔を見せる吸血鬼……ご主人様。
「え、えと、よろしくお願いします！」
勢いよく頭を下げる。
「そんなに畏まらなくていいわ。今日から咲夜から様々なことを学んで、役にたってちょうだい」
「は、はい！　頑張ります！」
えと、ご主人様から頑張れって言われたんだよね？　きっとそうだよね。
……頑張らなくちゃ。
「じゃあ、下がっていいわよ」
「失礼します」
「失礼しますっ」
今まで黙っていた十六夜さんがそういい、お辞儀をしてから部屋を出る。
私も見よう見まねでそれを行い、十六夜さんの後について行く。
部屋から出て少し。ふぅっと息を吐き、肩の力を抜く。
「コラ。気を抜かないの。紅魔館のメイドは完璧で瀟洒でいなければならないのよ」
「は、はい」
そこを十六夜さんに見咎められる。
瀟洒……どういう意味だろうか？　後で調べておこう。
「とりあえず、今日は掃除の説明だけしておくわ」
「はい」
「掃除は基本的に午前中に終わらせること。特別な手順を踏むものは私がやるから、貴女は妖精メイドたちに指示を出して床にモップがけ、窓拭き、トイレ掃除をしてもらうわ。
余裕が出来たら、私の仕事も手伝ってちょうだい。後は……そうそう。晴れの日は窓拭きをしたらカーテンを閉めておいて、夜になったら開けること」

それはつまり、日光が入ってきたらダメということか。
吸血鬼だもんね。日の光を浴びると灰になっちゃうんだよね。
「あの、午後は？」
「そうね。ついでに説明しておきましょうか。午後はお嬢様の相手や、食器、食材の買出しね。お嬢様が起きている場合、三時にはティータイムがあるからそのつもりで。買出しに行くときは美鈴を連れて行きなさい。人間の貴女には持ちきれない量だから」
美鈴さん……あの門番さんのことだろうか。
あの人も、人間じゃないのか。少しビックリ。
「夜はお嬢様の相手よ。血を吸われることがあるかもしれないけど、死んだりはしないから安心して。……そうそう。この館の地下は図書館になっているのだけど、そこにはお客様がいるの。くれぐれも粗相のないように」
「はい。分かりました」
お客様……どんな人だろうか？　いや、人じゃないかもしれないけれど。
それと、血を吸われるのかもしれないのか……やっぱり、痛いのだろうか？　吸血鬼になってしまったり。
「一つ、言い忘れていたことだけど」
「何でしょうか？」
「お嬢様の機嫌を損ねたら、貴方の運命が途絶えるわよ」
……？　えっと、何が言いたいのだろうか？
運命が途絶える。運命は物事の決まった道のようなものであって、それが途絶えてしまう。
つまり、死？
……。
「肝に銘じておきます」
「そうしてちょうだい」
うう～、怖い怖い。嫌だよ、死ぬことになるなんて。
「手遅れかもしれないけどね」

「え？」
「何でもないわ。さ、今日はもういいから部屋で大人しくしておきなさい。明日に備えてしっかり休むこと」
「はい」
「部屋は妖精メイドに案内させるから、しばらくここで待ってて。私は仕事に戻るから」
言い終わると、十六夜さんの姿が消える。
ふぅっと、肩の力をもう一度抜く。気疲れしてしまった。
「言い忘れてたわ」
「うわぁ！？」
と、いきなり十六夜さんが現れた。いなくなったと思っていたので物凄くビックリ。胃が飛び出るかと思った。
「私のことは、メイド長と呼ぶように」
「分かりました。めいど長。……それだけですか？」
「ええ、それだけよ。じゃあ、また明日。頑張ってちょうだいね」
「はい。頑張ります」
「スグに死なれては寝覚めが悪いものね」
「え？」
最後にボソッと呟かれた言葉は聞き取れなかった。
確認しようと聞き返すが、既にめいど長はそこにはいない。
一体、何を呟いたのだろうか？

妖精めいどに案内されて、これから生活の拠点となる部屋へ。
「うわぁ……何にもない」
あるのはべっどと、くろーぜっとと小さなてーぶる。
見事に殺風景である。
だが、私物の持込はＯＫらしいので（今の私には存在しないが）、

適当に持ち込んでみよう。
午後の買出しに行くときに、何か拾えればいいなぁ。
「できれば、煙草がいいな」
外の世界の。せんせーによれば外の世界の煙草は有害性が高いらしい。外の世界のものに限ったことではないが。
しかし、そこは私の能力で解決。いくら吸っても健康に害を与えることはない。
「お酒もあればなおよし」
これは日本酒でも洋酒でもいい。出来れば高級で美味しいもの。
でも、幻想郷に外のお酒が来ることって少ないんだよなぁ。外の世界でもお酒は重要なものなのだろう。
……そういえば、この館にはお酒があるのだろうか？　あるのなら、飲んでみたい。ブドウ酒とかないかな。
「つまみもあれば最高だよね！」
ちーずとか、かしゅーなっつとか、スルメとか。シイタケの傘に肉を詰めて油で焼いたものでもいいなぁ。
洋食のつまみとかはどんなものがあるんだろうか？　先にあげたちーずとかはありそうだが……。
「おっと、いけないいけない。涎で汚すところだった」
まだ一日しか着ていないのに汚すのは嫌だ。
汚すという言葉で思い出したけれど、お風呂は何処にあるのだろうか？
一日に一回くらいは体を洗浄したいのだけど……出来ないなら仕方がないかなぁ。
「明日めいど長に聞いてみよう」
呟いてべっどに飛び込む。すんごいふかふか。とろけそう。
「こんなところで寝たら起きれなくなりそう」
冗談抜きでふかふかに包まれて昇天しそうだ。天に昇るような心地とはまさにこのことだろう。
ゆーっくりと魂が抜け出ていきそう。

……それでもいい気がしてきた。
「ってよくないよくない」
一瞬変な考えが頭によぎり、それを打ち払うかのように体を起こす。
流石に仕事が始まる前に昇天するのはだめだ。だめだめだ。せめて一ヶ月は仕事しないと。それなら過労って言い訳できるかもしれないし。
「いやいや、言い訳したら駄目だよ」
自分で自分の思考に突っ込み。我ながら独り言が多い。傍から見たら気持ち悪いことこの上ないだろう。
「そういえば……月給幾らなんだろう？」
そもそも月給なのだろうか？　果たして幾らもらえるのやら。
まぁ、頑張れば頑張った分だけ、給金は上がるだろうけど。
……上がるよね？
上がる、ということにしておこう。うん、思い込みって大切だ。
「月給と言えば、お父さんやお母さんはどうしてるんだろう？」
母は寺子屋の手伝い、父は妖怪の山へ柴刈りに行っているらしい。妖怪の山に柴刈りへ行くという発想がおかしい気がする。訃報が届かないことを願う。
……私といい、お父さんといい、何て命知らずな家系だろうか。
というか、何で私は月給で両親のことを思い出したのだろう？
我がことながら不思議でならない。
「あに様は……無職か？」
おそらく、無職だろう。いわゆるにーと。奴は私以上に穀潰しだった。
「アレ？　穀潰し二人抱えながらも普通に暮らせていたってことは、お父さんとお母さん凄い頑張ってた？」
もしそうだとしたら申し訳ない。あわせる顔がなくなってしまいそうだ。物理的になくなるかもしれないけど。
頑張って働くかぁ。両親の老後も面倒見れるくらいにお金稼がな

いと。
「……クビにされないよう頑張ろう」
我ながら小さな目標だった。

のっとめいど（後書き）

批判批評、お待ちしております。

はたらくめいど　※前書き必読（前書き）

この作品に出てくる設定は九割が捏造設定です。実際の魔法、妖怪、及び原作設定とかなり違います。
そのことに耐えられる方はどうぞ。

この作品に出てくる設定は九割が捏造設定です。実際の魔法、妖怪、及び原作設定とかなり違います。
そのことに耐えられる方はどうぞ。

はたらくめいど　※前書き必読

起床。
布団が宙に浮くくらい勢いよく体を起こし、べっどから飛び出る。
そしてそこで一時停止。
「今……何時？」
呟き、窓のかーてんを勢いよく開け放つ。
……日が昇りきっていない。また、やってしまったようだ。
「この癖どうにかならないかなぁ？」
私には日の出の前に起きてしまうという癖がある。
早起きは三文の得というし、健康にはいいのだろうけど、時間が余りすぎるのだ。
それに、夜更かしした日の朝は辛い。
「まぁ、寝坊するよりかいいか」
そういうことにしておこう。
さ、新しいめいど服に着替えなくては。昨日は着ていためいど服のまま眠ってしまったし。
「皺ついちゃったけど、大丈夫かな？」
取れるから問題ない、といいな。
弁償になったら……その時考えよう。
今は着替えて、お仕事しますか。

「あら、早いのね」
「おはようございます、めいど長」
着替えてから部屋を出ると、丁度めいど長と出会った。
早いって……。めいど長はそれよりも早いわけだよね。
私より早く起きて仕事してるわけだし。

「はい、おはよう。今日はお嬢様が眠っているから朝ごはんを食べてから仕事に入りなさい。従者用の食堂があるから、手近な妖精にでも聞いて行ってきなさい」
「了解です」
「それじゃ、また後で」
それだけ言うとめいど長は一瞬にして姿を消す。昨日から何度も見ているが、どうやっているのか全く分からない。
一流めいどへの道はかなり長いようだ。
「地道に頑張ればいいかな」
まぁ、一流めいどを目指しているつもりはないんだけど。
「しかし手近な妖精……」
ぐるりと周りを見回すが、妖精めいどはおらず紅い壁や天井ばかり。
食堂へたどり着くのは時間がかかりそうだ。

三時間ほどかけて食堂へ到達。
妖精たちがわんさかいて、皆小さかった。
そんな中に、妖精たちより背の高い私が紛れ込むものだから目立って仕方がない。
気にしないけど。気にしてたらやっていけないよね、きっと。
「ご飯くださーい」
そういえば、誰がご飯を作っているのだろうか？
妖精が作っているとは思えないんだけど……まさか、めいど長？
いやいや、流石にそれはないよね。そうだとしたら何百食を作ってることになるだろうし。
「何を考えてるんですかぁ？」
と、めいど長の仕事量を考えていると、声がかかった。
見ればめいど服を着た子供くらいの背丈の妖精が、手にご飯の乗

ったとれいを持って現れた。
「いや、ご飯は誰が作ってるのかな、と」
「うん？　新人さんですかぁ？」
「ええ、まぁ」
新人も新人。妖精も新人になるのか気になるが、聞くのはまた今度にしておこう。
「ご飯はですねぇ、自分で作るんですよぅ」
「自分で、ですか」
「ですぅ。メイド長もご飯作る時間がないんでしょうねぇ。いてもいなくても変わらない妖精のご飯を作る時間があるとは思えませんしぃ」
なるほど。自分で作って食堂で食べるのか。
いわゆる、せるふさーびす？
というか、いてもいなくても同じって。
「同じなのですよぅ。私たちは自分の洗濯と食事の準備と掃除くらいしか出来ませんからぁ」
アレ？　そんな集団の指示を任された私って案外役立たず？
「時折侵入者の撃退を任されることもありますがぁ、十中八九失敗しますねぇ」
侵入者がいるの？　嫌だなぁ。戦えない私には逃げることしか出来ないのに。
「というわけでぇ、貴女の分ですよぅ」
どういうわけなのかは全く分からないが、妖精さんがとれいを差し出してくる。
「私の、ですか？」
「ですよぅ。明日からは自分で作ってくださいねぇ？」
「ありがとうございます」
「どういたしましてぇ」
とれいを受け取る。久々に誰かの手料理を食べる気がする。
三日前に母の味噌汁と白米食べたけど。

「それじゃあぁ、私はこれでぇ」
妖精さんは右手を上げ、そして立ち去ろうとする。
「あ、待ってください」
「？　何かぁ？」
呼び止めると妖精さんは、疑問顔でこちらを向く。
「名前、教えてくれます？」
そう聞くと、妖精さんはキョトンとした顔になった。
何かおかしなことでも言ってしまったのだろうか？　昨日から同じ心配ばかりしている気がする。
「妖精には名前がないんですよぅ。特別な力を持っていない限りぃ、固有名詞を持つことはありません」
そうなのか……。特別な力……湖にいる氷精みたいなのか。
あんなのが、特別ねぇ……だらしなく無防備に湖で寝てたりする氷精が。
よく分からないものだなぁ。
「私は夜空天満です」
「はいぃ、ではぁ、また後でぇ」
別れを告げて食堂の席に着く。
妖精さんが作ってくれた料理は、西洋料理だった。
ぱんとすーぷと、野菜のさらだ。
大変美味でした。

掃除。
それは即ち、館に害なす汚れどもを一片たりとも絶滅する行為。
「というわけで頑張りましょー」
もっぷを右手に、雑巾を左手に、足元にばけつを置いて左手を握

っておーと上に伸ばす。
それを見ていた妖精……大体数百人くらいが私の真似をしてくれた。なんていい子達なの！
「それじゃあ、窓掃除組みは水拭きとわいぱーに分かれて、水拭き組みはぶらしも持ってね。水拭き組みは窓を水拭きしてからぶらしでぶらっしんぐして、わいぱー組みはぶらっしんぐが終わった窓を丁寧に拭くこと」
『はーい！』
元気がいいね。妖精たちは。子供みたい……って子供だね、妖精は。
「次はかーぺっと組み。かーぺっとろーらーでゴロゴローっとやっちゃって。廊下組みはもっぷで同じようにやってね」
『はい！』
うん。素晴らしいね。やる気があるのはいいことだ。まぁ、一生懸命やれば遊ぶ時間が増えるよって言ったら簡単にやる気出したけど。
ちなみに。今妖精たちが使っている器具はめいど長が用意したもの。魔法の森の道具店で買ってきたんだって。
……結構最新のものっぽいのに、どうして幻想入りしたんだろうか？　不思議。
「次は厠組み。ぶらしでこすって来てねー。その次はお風呂。お風呂は、お湯で全体を洗い流してから、冷たい水で洗い流してね。その後わいぱーで水を切ること」
『了解！』
おお、格好いい。どこで了解なんて言葉覚えたんだろう。
……しかし、仕事に移るのが速いなぁ。そんなに遊びたいのだろうか？　遊びたいんだろうなぁ。
「さて、私はきっちんのお掃除かな」
終わったらお菓子でも作っておいてあげよう。何百食も作るのは大変だけど。

まぁ、白玉餡蜜くらいだったら、大丈夫……かな。

日が真上を通り過ぎたころ。
「もう掃除が終わったの！？」
掃除の終了をめいど長に伝えに行くと、目を見開いて驚かれた。
「終わりましたけど……どうかしたんですか？」
「い、いや、予想外だったものだから……。どうやったのかしら」
「掃除終わったら館の外に出て遊んでいいですよーって言ったら凄いやる気出してくれました」
「そんなことで……」
思ったんだけど、ここの妖精は外にいる妖精よりも賢い気がする。結構合理的な思考をしているんじゃないかな。
「洗濯はどうしたの？」
「水を出せる妖精たちに手洗いしてもらって、風を出せる妖精たちに乾かしてもらいました」
まぁ、洗濯の指示は出していなかったんだけど。めいど長にも言われてなかったし。
能力とまではいかないけれど、そういうちょっとしたことができる固体もいるみたい。
自然の具現だからだろう。阿求ちゃんがそんなことを幻想郷縁起に書いてた気がする。
「……そう、報告ありがとう。少し休憩してから、美鈴を連れて人里へ買出しに行ってきてくれる？　これ、買うもののリストよ」
「分かりました」
差し出されたためもを受け取る。
休憩……殆ど働いていないから、十分くらいしたら行こうかな。

「あの、美鈴さん。本当に大丈夫ですか？」
「大丈夫ですよ。こう見えても私は妖怪ですからね～」
それにしても米俵三つは持ちすぎだと思うのだけど。
他にも野菜とか、調味料とかもあるのに。
「ところでいいんですか？　家族に会っていかなくて」
「昨日の今日ですから大丈夫ですよ。会いに行ってもやることありませんし」
「ならいいんですが」
おやつ時。私は美鈴さんと人里へ来ていた。
目的は買出し。殆ど買い終えて、後は帰るだけである。
「そういえば、どうして火事になったんです？」
「えーっと、恥ずかしながら寝煙草です。父の」
私が拾ってきたものを勝手に吸いやがったんだよね。しかもうとうとしながら。
火はゆっくりと広がって、気づけば時既に遅し。逃げるだけしか出来なかったとさ。ふざけんな。
……まぁ、何で煙草の火が木造の家屋に燃え移ったのかは謎だけど。今度せんせーに聞いてみよう。
「煙草ですか。珍しいですね」
「そういったものを拾うのが私の能力ですから」
意外と重宝してる。たまにはずれもあるけれど。
「美鈴さんは煙草とか吸います？」
「私……というか紅魔館に住んでいるものは基本的に吸いませんね。お嬢様が嫌いですから」
そうなんだ。じゃあ、吸うときは気をつけないと。
「体に悪い、というより、血液が不味くなってしまうからでしょうけどね」

「不健康ってことですか？」
「噛み砕いて言えばそうですね」
確かに、吸血鬼にしたら不味いものを飲むより美味しいものを飲みたいだろう。
飲むかどうかは別として。
「美味しいものは健全な肉体に宿る。そんな認識でいてくだされば結構ですね」
「分かりました」
そこまで言って、会話がなくなる。
出会って一日二日だから話題がないのだ。あっても会話が続かない。
先ほどまでは、買い物のことで会話が繋がっていたからいいものの。
「そういえば」
「はい？」
「天満さんは、妖怪が怖くないのですか？　妖怪は人里の人間は襲わないようにしていますが、しかしそれでも、人々の恐怖から誕生した恐怖の塊です。怖くないんですか？」
んー……と。
「能力の都合上、そういったものはないんですよね」
「能力？」
「はい。浄化する程度の能力です。めいど長から聞いてません？」
美鈴さんが首を振る。どうやら聞いていなかった模様。
「これは、せんせーの受け売りなんですけど。私の浄化する程度の能力ってのは、清浄を保つってことらしいです。清浄は正常へ繋がり、私、及び周囲を『せいじょう』に保ちます。要は、つねに自然体になっている状態だそうで」
「つまり、取り乱したりすることがないと？」
「そんなところです。もっと言えば、身体の状態やなんかも『せいじょう』に保ってます」

「だからそんな美味しそうな匂いを……」
はい？　……はい？
「いえ、天満さんの能力は無理やり自然体にしているだけであって、恐怖心に気付いていないだけですよね？」
「……おそらくは」
「妖怪が人を喰らうのは、それが手っ取り早く恐怖を集められるからです。生きたまま末端から食べるにしても、殺してから食べるにしても、どちらにせよ人間にとってはかなりの恐怖であることは間違いありません。ですが、恐怖を集めるだけ、というのは遠い昔に終わっているんです。人間は妖怪が人間を喰らうのは何か理由があると考え、そして妖怪はその影響を受けたんです。それから妖怪は、霊格の高い魂を求めるようになったし、人間の肉を自身の血肉にすることで力をつけてきた」
美鈴さんは一度言葉を区切り、こちらを向く。
「天満さん。貴方は妖怪にとって最上級の餌です。恐怖の自覚がない故に近づきやすく、しかし恐怖を感じている。能力のお陰で穢れ一つない肉体は数多くの妖怪が食べたいと思うでしょう」
「は、はぁ……」
「……気をつけてくださいね。妖怪は人里の人間に手出しはしませんが、しかし貴方はこちら側へと足を踏み入れています。――何時何が起こっても、おかしくはないです」
本気で心配しているのであろう。美鈴さんの目は、都へ上る娘を思うような、そんなめだった。
しかし同時に、どこか期待しているような輝きもある。
「それと、一つだけ注意を」
「はい」
「妖怪は人間でいう三大欲求のうち、二つしか持ち合わせていません。睡眠欲と、食欲または性欲。食欲は性欲、性欲は食欲で代替することができます」
「つ、つまり？」

「……もしかしたら、性的に襲われるかもしれないので、注意しておいてくださいね」
「……肝に銘じておきます」
しかし性欲と食欲が代替可能とはいったいどういうことなのだか。
尋ねると、
「妖怪は個でありながら群ですから。食事によって個が生きながらえようが、繁殖によって群として増えようがあまり変わらないんです」
ん、んぅ……？
「その妖怪が食事……人間を食べることによって、妖怪という群が生きのこることはなんとなく理解できるんですけど、繁殖して群の数が増えたとして、食事と同じように恐怖されるんですか？」
妖怪が人間を食べれば、人間はその妖怪個人ではなく妖怪全体を恐怖し憎む。
では、繁殖によってそれと同等の恐怖を得られることが出来るのだろうか。
「出来ますよ。ほら、数の暴力ってよく言うでしょう？　人里の隣に妖怪一匹がいるのと百を超える数がいるのとでは違いますよね？
人間は、数の多いものに恐怖心を抱くんですよ」
そこで言葉を区切り、それに、と美鈴さんは続ける。
「繁殖というのは、何も妖怪同士のことだけではないです。妖怪が人間を性的に襲っても、恐怖は得られます」
「そうなんですか？」
「ええ。たとえば、女性の妖怪がいて、人間の男がいたとしましょう。妖怪は人間を襲い、その身に自身と人間の子を宿します。怖くありませんか？　自身の子が、妖怪という得体の知れない生命体の腹の中にいるというのは。更に言えば、妖怪を孕ましてしまった。人里の仲間からはなんと言われるだろう。妻は、子供は、両親や兄弟は。もし迫害されてしまったら、受け入れてもらえなかったら。不安が不安を呼び、泥沼化してしまうんですね」

あはは、と軽い笑いを上げる美鈴さん。
こうしたところを見ると、やはり、美鈴さんが人間ではないのだと思い知らされる。
優しく、温和な美鈴さんだが、しかしそれでも妖怪なのである。
「逆もまた然り、ですよ。むしろ男の妖怪が人間の女性を孕ませた方が恐怖は大きいかもしれません」
確かに。もしも私が妖怪に強姦され孕まされたとしたら、かなりの恐怖心を抱くだろう……ってまぁ、自然体で正常な状態を保っているかもしれないけれど。
だが、不安なのは確実だろう。自身の腹に、人間の天敵ともいえる存在がいるのだから。
「ですが、基本的に襲われる可能性は少ないでしょう。幻想郷の人間と妖怪のバランスは保たれているのですから、それを壊すような真似はしないでしょう。……まぁ、お嬢様たち吸血鬼や天狗など、頭のいい妖怪に限りますが」
「頭がいいんですか？」
「というより、少しでも知恵があれば、ですね。妖怪が、こちらに踏み込みかけているとはいえ人里の人間の貴方に手を出すことが何を意味するのか。それが分からないのは本能のままに生きる、妖怪ともいえない妖怪だけです」
そこら辺はよく分からないや。
人間と妖怪の関係は色々と複雑らしく、自ら進んで知ろうとは思わなかったからだ。
「……あ、そういえば、襲われたらどうすればいいんですか？」
「弾幕ごっこ……理性のない奴にだったら適当に弾幕を撃ち出せばいいと思いますよ」
弾幕ごっこ。稗田さんちに原案があったような気がする。美しさと思念をなんたらかんたら。
正式名称は命名決闘……だったはず。
「ところで、弾幕経験は？」

首を横に振る。最近の幻想郷には空を飛べる人間の女の子は少ないのだ。

買出しから戻ると、美鈴さんに館の地下にある図書館につれてこられた。

大量の本棚が並び、同じく大量の本が納まっている。

「ええっと、ヴワル魔法図書館とか言ってましたっけ？」

図書館の入り口で呟く。美鈴さんが教えてくれた図書館の名前だ。

「――違うわ」

けれど、それを否定する言葉が一つ。

出所を探ると、本を数冊抱えた紫色の女性がふわふわと浮いていた。

「え？　えと」

「ここはただの大図書館。ヴワルは遠い昔になくなったわ」

「そう、なんですか？」

聞くと、女性はコクリと頷き、そのまま私の前に降り立つ。

小柄だ。……といっても、私と同じくらいだが。

「私はパチュリー・ノーレッジ。この大図書館の主よ。貴方が咲夜の言っていた新しいメイド？」

今度はこちらが頷く。

パチュリー・ノーレッジと名乗った紫色の女性は、「へぇ」と一つ声を漏らし、興味深そうな視線をこちらに向けた。

「見たところ普通の……。……天人っぽい人間ね」

「て、天人ってなんですか？」

「あら知らない？　全ての欲を捨て天上にて遊びながら暮らす人ならざるもの」

全ての欲を捨てるって……。私のどこが天人っぽいのだろうか？

私は普通に欲があるのだけど。

「まぁ、どちらかというと仙人に近いかもしれないわね。妖怪が好

みそうな身体をしてるもの」
仙人。大陸の道教とやらを信仰している人か。
道……物事の始まりと終わりと同化することを目的としていて、そのために不老不死を手に入れるために丹を煉るとか何とか。
あに様が長々と語ってくれたような気もするが、なんだったかな。
仙人は木の実を食べて暮らしてるとか、霞を食べるだとか。
「似てます、か？」
「似てるわ。けれど、似てるだけよ。貴方は仙人に近い感じがするけれど、人間よ。……それで、貴方の名前は？」
「あ、夜空天満といいます」
「……大層な名前ね。それで、何か用かしら？　見たところお茶を持ってきたわけではないようだし」
そこで本来の目的を思い出し、用件を口にする。
それは弾幕ごっこを教えてほしいというものだ。
私は空も飛べないし弾幕も撃てない。正直、今まで妖怪に襲われなかったことが不思議なくらい（なのだろう）。
それで、自衛のためにということで弾幕をどうにかして出来るようになろうと思ったのだけれど、美鈴さんは弾幕が苦手らしく教えてもらうのは断念。
そのかわり、この大図書館にいる人物に教えを請えば何とかなるかもしれないと言われたのだ。
「なるほどね。貴方の話と能力を聞く限り、弾幕ごっこを出来るようにするというのは、悪くない判断だわ」
とはいうものの、個人的にはまだ半信半疑なのだが。
私は今まで生きてきた十六年間で一度も妖怪に襲われたことがない。迷いの竹林や太陽の畑など、色々なところをふらついていたりするのだけど、襲い掛かってくるような妖怪はいなかったのだ。
いや本当に。嘘ではない。
せんせーに色々されていたからかもしれないけれど、うん。
「……それと、素朴な疑問なんですけれど」

「何かしら？」
「その、ご主人様や美鈴さん。そして、えっと……パチュリー様は私に襲い掛かったりは……しませんよね？」
「私はともかく、レミィや美鈴は分からないわね。まぁ、レミィの場合は貴女の血を見せたりなんかしない限りは大丈夫でしょう。美鈴はそもそも殺生を好まないから大丈夫だと思うわ。……たぶん」
最後の最後で不安になることを呟かれた。
「まぁ、恐怖を糧にするって言うのは原則変わらないけれど、種族によって変わってくるのよ。恐怖の摂取方法は。
そこら辺、人間と妖怪の差、だよね。
人間は全員が全員、物を口にし租借し嚥下する。けれど妖怪は、吸血したり人間と同じように租借したり、驚かすだけでよかったりもする。
摩訶不思議だね。さすが想像の産物。
「それで、本題に戻すけど。ハッキリ言って貴女が弾幕ごっこを出来るようになるかは、分からないわ。ここにあるものは殆どが魔導書で、それ以外のものは外の世界の本。貴女に魔法の適正があればそれでいいのだけれど、なかったらお手上げだわ。神仙術や陰陽術、妖術、道術の類は伝聞でしか知らないからねぇ」
「魔法の適正？」
「要はどれだけ魔力を有し、上手く扱えるか。少しでも適正があれば、後は努力でも何とかなるのだけど、適正がまったくなければ魔法を使うことはできないわ」
「努力でなんとかなるんですか？」
「ええ。魔法とは学問よ。今でこそ戦闘にも使えるようになったけれど、その根源は未知を知るための道よ。これは道術にも言えることだけれどね。魔法はこの地球が持つエネルギーをどうにかして利用しようと考えた人物が探り始めた学問なの。学問である以上、努力さえすれば一定のレベルに達するのは当然といえるわ。まぁ、その一定のレベルを超そうとなると、先天的な才能が必要になるんだ

けど」
　ああ、それが歴史上の偉人たちか。魔法ではないけれど、天才だからこそ残せた結果を持つのが偉人たち。
　かつて地球が平らだというのが常識であるなか、地球は丸いということに気付けた人物。そういった人物が天才であり、一定のれべるを超えられる人なのだろう。
「安心していいわ。学問だからこそ、適正をまったく持たない人は稀だから。万人ができない学問なんて廃れてしまうだけだからね」
　そりゃ、寺子屋で和差積商習う前にいきなり方程式出されたら誰もやる気しないよね。
「そんなわけだから。明日また来なさい。色々と用意しておくから」
「分かりました」
　最後に礼を言って一礼。踵を返し地上に戻る。
　……やけに親切だったけれど、どうしてだろうか？

るーんめいど

仕事の合間にめも帳を開き、一つの漢字を延々と書き込んでいく。
浄、という漢字だ。
めも帳一ページにつき一つ書き込んでいる。
魔法の練習だ。厳密には、魔法ではないのだけど。
しばらく続けていると、めも帳のページがなくなる。
漢字自体の画数が少ないため、かかった時間は大体三十分ほどだ。
「てゃ」
自分でも首を傾げたくなるほど変な声を出しページをちぎる。
それに何かを送り込むようないめージで念を送る。
数秒。念を送り終わった後は、雨で汚れてしまった窓に投げつける。
ページはどんな紙を使っているのか、窓へとまっすぐに飛んでいく。不思議だ。
「……あっ」
ページが窓にぶつかる。そして床に落ちることなく霧散し、次の瞬間には窓の汚れがなくなっていた。
成功。
「初めての成功だね」
そう。これが私、夜空天満が初めて成功させたるーん魔法である。
正式には、文字式符術っていうんだけどね。

さてはて。何故私が符術なんかを練習しているのかと言うと、魔法が使えなかったからである。
何故魔法が使えないのか。答えは単純で、魔法を扱うために必要な魔力がなかったためである。
魔力は元来ほぼ全ての人間が持ちうるもの――程度はあるけれど

――であり、全くないということは少ないらしい。
少ないだけであり、極稀にいるだそうだが、私の場合は能力が関係しているのだとか。
魔力は少なからず人体に影響を与える。それは悪いものではないけれど、しかし身体にとって異常が起きていることには変わりがない。
だから、正常を保つ私の能力は魔力を別のえねるぎーに変換しているのだとか。そのせいで、魔力がない。
……貰ってから便利な能力だとしか捉えていなかったが、しかし意外なところで不便な能力だと発覚した瞬間だった。
魔法が使えない、ということで私は頭を抱えた。
妖怪に襲われる可能性が濃厚で、なのに自衛手段を持たないとはこれ如何に。まだ死にたくない。
その後どうすればいいのか分からなくなったため、パチュリー様に泣きつくとるーんなら使えるのではないか、と言われたのだ。
るーん……要するに文字だ。文字に力を注ぎながら書くことで不思議な現象を起こす魔術。何に書くかは、紙であったり虚空であったり。
これならば、魔力がなくとも霊力で発動できるらしい。
なので何とか使えるように努力していた、というのが今現在の状況である。
「努力といっても、ただ文字を書くだけだけど」
しかし文字を書いてから紙に念を送るなんておかしくないだろうか？　これでは文字の魔術なんて到底言えない。紙の魔術だ。
まぁ、文字に力を注げるほど上達していないからなんだけれど。
……あれだ。魔力の時も思ったけど何ゆえそんなえねるぎーがあるんだろうか。あると言えるのだろうか。
使える人たちにとってはあるものだし、それは当然のことなんだろうけれど。実体がないのにどうやって判断しているのだろうか。
と、自分の霊力が感じ取れない私の言い訳はおいておいて。

「もうすぐ誕生日か……」
もうすぐ、というより二日後である。今は師走に入ったばかりの日だし。
さてどうするか。貰った給金のあまり（八割ほど家に送った）で、自分にぷれぜんとなるものを買ってみようか。
……やめておこう。空しいだけの気がする。
「ま、祝ってくれる人なんて少ないだろうけど」
四年間の引きこもりは大きかった。寺子屋の同級生にさえ忘れ去られていたのだから。
冗談だが。えらく懐かしまれただけだ。自分の駄目人間さを直視することになってしまったが。
そんなことをつれづれなるままに考えていると、とんとん、と肩を叩かれた。
妖精めいどの一人だ。妖精にしては珍しく寡黙な個体だ。何がどうなってこんな妖精が生まれたのやら。
「どうかした？」
「……おきゃくさん」
「私に？」
首肯される。
私が紅魔館で働くようになってからというもの、妖精めいどたちの仕事能率が上昇したらしい。そのため、来客の対応なども任されるようになったのだが、そのことらしい。
ご主人様でもパチュリー様でもなく、めいど長でもなく私にお客さん。……誰？
とりあえず行ってみることにする。妖精めいどに礼を言い、別れを告げて玄関の方へ。
そこに立っていたのは、
「やぁ、天満ちゃん。久しぶりだね」
「ああ、あなたは……」
久しぶりに会うすごいひとだった。

来客の対応を済ませ、図書館へ向かう。
彼女は私に会うためだけに来たようで、めいど長やご主人様、パチュリー様に会うことなく帰っていった。
本当に会うだけ。顔を合わせて少し世間話をした程度だ。
どうせならご主人様に会っていけばよかったのに、と思わなくもないが、彼女にも都合があるのだろう。無理強いはよくない。
「失礼しまーす」
と、図書館に入る際は声をかけているのだけど、意味があるかは分からない。
大とつくだけあってこの図書館はかなり広い。パチュリー様が奥の方にいたとしたら、確実に聞こえていないだろう。
今回はまさしくそのようで、返事がない。ただ単に無視されているだけなのかもしれないけれど。
さてどうしよう。この迷路のような図書館でパチュリー様を見つけ出すのは至難の業だと思うのだけど。
空が飛べたりすると楽なんだけどね……。靴に符術みたく文字を書いてみたら飛べないだろうか？　失敗したときのことを考えると怖いからやらないけれど。
「……とりあえず適当に歩いてみようか」
このまえみたく迷子にならなければいいが。
入るときは迷子になって出るときはまっすぐ帰れるのはどういうことだろうか。
まあいいけど。
迷うといえば、迷いの竹林は名前負けしすぎではないだろうか。
一度も迷ったことがないのだが、はて。
そんなくだらないことをつらつらと考えながら図書館をうろうろしていると、赤い髪の女性に出くわした。

司書服に、背中の翼。……背中の翼は置いておくことにして、司書服を着ているということは図書館の関係者だろうか。
「夜空さんですか？」
首を傾げる私に、柔和そうな笑みを浮かべる女性。どうやら私のことを知っているようだ。
ということは図書館、もしくは館に関係のある人――人じゃないけど――なのだろう。
「えっと、はい」
答えないわけにもいかず首を縦に振る。
女性も同様に一つ頷いてから、
「私は小悪魔といいます。この図書館でパチュリー様のお手伝いをさせていただいてます」
小悪魔さん。……小悪魔は種族名な気がするのだけど。
そんな思いが顔に出ていたのか、小悪魔さんは苦笑しながら、
「本名は別にありますよ？　けれど、人間には発音が難しいですので……。そうですね、擬音にするならシュヴェォウワみたいな感じです。パチュリー様やレミリア様なら発音できるのですが……」
……何故擬音で表したのだろうか？　というか擬音？
まぁ、何にしても一々名前を呼ぶのにシュヴェォウワとか言ってられないよね。周りの視線もあるだろうし。
「と、そういえば何していたんですか？」
「えっと、パチュリー様を探しに。符術が一応成功したので」
「もうですか？　速いですねー」
「少し教えてもらったので」
すごいひとに。あの人何でもできるんじゃないかな。比喩だけど。
「そうなんですか？　知り合いに魔法使いでもいたりします？」
「一人だけ」
今頃魔法の森で色んな実験をしていることだろう。茸やらなんやらで。
そういえば、ここ半年顔を見てないなぁ。年末くらいに会いに行

ってみようか。
「やっぱりですか。納得です」
そこで話を切り上げ、小悪魔さんはパチュリー様のところへ道案内をしてくれる。
本棚の番号を覚えているらしく、大体どこら辺にいるのか分かるのだとか。凄い記憶力だ。
「パチュリー様。夜空さんが符術、成功させたらしいですよ」
「……もう？」
パチュリー様は手に持った本に注いでいた視線をこちらに向ける。
その視線には少し驚きが混じっているように思える。そんなに凄いことなのだろうか？
「凄いというか……驚いているのは確かね。自身の中にある霊力や魔力に気づくというのは、案外難しいものだから。正直、もう少し時間がかかると思っていたわ」
確かに難しかった。教えてもらったらすぐに出来るようになったが。
「まあ、いいわ。一度見せてくれる？　小悪魔は仕事に戻りなさい」
「了解しました」
そう返事をして去っていく小悪魔さんを横目に、パチュリー様から差し出された紙に浄の字を書く。
教わったとおりに霊力を流し込みながらだ。
「……へぇ」
パチュリー様の感嘆が聞こえた。
しかし気にせずに、紙にも霊力を流し込む。
すると、霊力が流し込まれた部分からさらさらと崩れ去っていき、数秒で完全になくなる。
一瞬の静寂。
パチュリー様が床のある一点を注視し、私も同じように視線を注ぐ。
そこでは浄化が起こっていた。浄化、というと飾っているような

響きがあるが、要は綺麗になっているということ。
埃がなくなっているのだ。私の符術によって。効果範囲は紙があった場所から半径十めーとるほどの円形になっている。
「確かに発動しているわね。もう少し発動が速くなって、媒体が消えないようになれば文句はないんだけど」
これでも速くなったほうなのだが。
媒体……紙は消えるものじゃなかったのか。てっきりそういうものだと思っていた。
「要精進。これならあと一ヶ月くらい練習すれば使い物になるわね」
あと一ヶ月か。
……どうせなら、これを仕事に活かせないかなぁ？　今の浄の字を常に発動しているようにすれば掃除が楽になりそうだし。
色々試してみようっと。

誕生日を無事に向かえ大晦日。
今こそ練習の成果を発揮するとき！
「めいど長ー。掃除しなくてもいいようになるもの作りましたよー」
「は？」
掃除道具を持ったまま変な顔をするめいど長に、一枚の紙を見せる。
それには『吸』『力』『永』『続』『範』『囲』『十』『間』『内』『浄』『透』『貼』『付』と十三文字の漢字が書かれている。
『浄』の文字を中心に、他の文字は円を作っている。
「これ使えばですねー、半径約二十めーとるは掃除やらなくていいんですよー。一年に一度張り替えなければなりませんが」
「いやいや貴女ちょっと待ちなさい。それ本当に効果があるの？」
「ありますよぅ。周りに力……霊力とか魔力があり続ければ半永久的に効果範囲内を浄化させるんですから」

パチュリー様にも合格点貰ったんですから。と続ける。
「実演します？」
「そうね。見せてもらおうかしら」
ということで紙を床に置き霊力を流し込む。一瞬それぞれの文字が弱く発光し、すると紙が見えなくなっていく。
「消えたわね。失敗？」
「違いますよー。『透』の字の効果ですね」
ともあれこれで発動しているはず。
「……ふぅん。なるほど。確かにここから半径二十メートルに埃がないわね。……いや、ないというより別のものに変わってるのかしら？」
「その通りです。浄化っていうのは悪いものを良いものにすることですから、埃なんかの汚れは良いものに変わってるんです。それが何に変わってるのかは私にもよく分かりませんが」
例えれば、飲めたものじゃない水を飲めるようにするのが浄化である。
「駄目じゃないの。何に変わるのかしっかり把握していないと」
「そうは言いましても、多分大気中に含まれる何かに変わってるみたいなんですよ。だから、確かめるのは難しいんですねー」
パチュリー様に頼むのも、ねぇ？　パチュリー様にだってやることはあるのだろうし。
「まぁ、害がないのならいいわ。それで、なんに使うつもり？」
「館とか。……あとちょーっとだけ人里で売ろうかなー、なんて」
「ここで使うのはいいとして。人里で売れるの？」
「売れますよきっと。一枚貼り付けるだけで一年間掃除しなくていい……というより、埃や雑菌が溜まらなくなるんですよ？　きっと売れますって」
原材料はほぼ無料だしね。
ちなみに半永久的に使えるのに、一年間だけといっているのはめんてなんす的な意味だ。

術式的に半永久的に動くのは間違いないのだけど、しかし実際見てみないことには分からないのだ。
「……その商売に熱中してこちらの仕事に手がつかなくなる……なんてことにならなければいいわ。許可しましょう」
「ありがとうございます」
「でも、これ半径二十メートルだけ？　そうだとしたら、たくさん使うことになるのだけど」
「大丈夫ですよ。適当に選んだ範囲がそれであって、範囲は幾らでも変更可能ですから」
文字を変えるだけだしね。お手軽。
「そう。なら待ってなさい。ちょっと調べてくるから」
一瞬めいど長の姿が消え、そして次の瞬間に現れる。
告げられた館の大きさを頭に叩き込みながら、いったいどうやって瞬間移動しているのか尋ねてみる。
「時を止めているのよ？」
「ときって……時間のですか？」
「それ以外に何があるのよ」
朱鷺とか。会話を考えると、ここで朱鷺が出てくるのはおかしいのだけど。
でも、時間かぁ。時間を止めて動いているから、瞬間移動しているように見えるわけだ。
「人間離れしてますね」
「貴女もね」
む。私はそんなに人間離れしていないつもりなのだが。
「能力持ちって言うのは、大体人間離れしているものよ。それが、先天的な能力ならなおさらね」
「……先天的？」
……あれ？　もしかして言ってなかったっけ？
「どうかしたの？」
「いや、私の能力って二つとも後天的なものですよ？　小さい頃に

貰ったんです」
　すごいひとに。確か、五歳くらいのときだから、十年以上前だね。
「奇特な人物もいたものね。私みたいに、家族から受け継いだりするのが普通なのに」
「めいど長も貰ったんですか？」
「母親にね。私の時間を操る程度の能力は、代々受け継がれているものらしいわ」
　そうなんだ。でも、人間が能力を持つことってかなり少ないから、そうやって受け継ごうとするのも分からなくはない。
　なんというか、一子相伝？　そんな感じだろう。
「まぁ、ここでの言い表し方にそうのなら、だけどね」
「どういうことです？」
「ここでは自身の能力や特技、身体的特徴とかを冗談めかして『～～程度の能力』と言い表すのよ。だから、私のは後天的ではあるけれど、時間を操る技術を有しているってことをそう言い表しているだけ」
　んん？　私は浄化する程度の能力と、珍しいものを拾う程度の能力。それらを能力として貰ったのだけど。
　……んー。何か、めいど長の言っている能力の受け継ぎと、私が能力を貰ったのはどこか違う気がする。
　上手く説明できないのだけれど……むぅ。
「そういえば、言い表しというのなら、面接の時どうして『能力の有無』なんて聞きかたしたんです？　今のでいうのなら、『特技の有無』って聞き方の方がよかったと思うんですけど」
「それがねぇ。つい最近まで勘違いしてたのよ。てっきり能力は受け継ぐものばかりだと思っていてね」
　お嬢様に指摘されたのよ、とめいど長。
　今知ったけど、この人案外お茶目かもしれない。私が言えた事ではないが、どこか抜けているというか。
「っと、無駄話はここまでにしないとね。私は仕事に戻るから、貴

女もそうしなさい」
「はーい」
返事をし、貼り付けていた紙を剥がし自室へ向かう。紙を持っていたって邪魔になるだけだしね。
「……ああ、それと。年が明けたら新しい仕事を任せるから、覚えておいてね？」
先ほどまでと打って変わって、冷たい声。
それに驚いて、返事をするのが一拍遅れてしまった。
新しい仕事。今までとは違う仕事なのだろうけど……いったいどんなことだろうか？

めいどいずどらんくぶらっど（前書き）

なんとなく英語。
あってるかどうか激しく不安だけど

めいどいずどらんくぶらっど

少し先も見通せないほどに暗い、館の地下にある一室。
そこで私は、泣きじゃくる幼い金髪の吸血鬼を抱きしめられていた。
吸血鬼ゆえに抱きしめられる力は強いが、少し苦しさを覚える程度であり、無理に払うこともできない。
いや、払う気は毛頭ないのだけど、しかしどうして泣いているのか聞かせてほしい。
私の首筋に牙をつきたて、血を飲んだ直後に泣き始めたのだから、私に理由があるのかもしれないし。
「あー……えっと……。お嬢様？　そろそろ離してくれると」
そこで肩がビクリと震え、腕の力が強くなった。
「いやっ……。一人にしないで……！」
泣きそうな声だ。しかし、一人にしないでと言われても。
「はぁ……」
ため息を一つ、聞かれないようにこぼす。
いったいどうしてこうなったのか。なんてのは、考えるまでもなく決まっている。
今朝言い渡された、ご主人様の妹である、フランドール・スカーレット様の侍女をやることを命じられたからだ。

事の発端は今朝。
吸血鬼なのに朝起きるという、不思議なご主人様に呼び止められ直々に地下室に妹がいるから、彼女のめいどをやりなさいと言われたのだ。
拒否権は当然なし。まぁ、断ることでもないし。ご主人様が言う

には、めいど長もこのことを知っているみたいだし。
どうやら専属、というものになるようだった。基本的には妹様の命令に従うこと、と教えられ、最後に頑張りなさいと激励を受けた。
そのときのご主人様はなにやら楽しげで、唐突に踊りだしそうなくらいだった。
正直そんな様子に一歩引いてしまったが、それは秘密だ。首が飛びかねない。
で、そんなこんなでめいど長に注意事項を聞いたり、パチュリー様に何故かお守りを貰ったりしてから地下へと赴いた。
大図書館よりも更に下だ。そこにある、小さいながらも広いと感じる部屋。
べっどに机にお人形。それらは、暗くて輪郭しか見えなかったが、しかし暗い中でも一つだけハッキリと確認できるものがあった。
いや、いたと言うべきか。
十歳になったばかりの子供と同じくらいの背丈。キラキラと輝く金の髪。背にある宝石のような翼はゆっくりと動いており、紅い瞳が私の身体を射抜いている。
妹様、なのだろう。その雰囲気は剣呑で、しかし疑問符が満ち溢れているような。よく分からない例えだがそんな感じだ。
「あなたはだあれ？」
ふぁーすとこんたくと。
「え、と。夜空天満といいます。妹様の専属めいどになりました」
「わたしの？」
剣呑さが引っ込み、疑問が驚愕に変わったようだった。
はて。どうしてそこまで驚くのだろうか？
「いや、アイツがそんなものを寄越すなんて初めてなものだから」
「アイツ？」
……会話と立場的に考えると、ご主人様のことだろうか。
むぅ。家族をアイツって言うのは……。でも姉妹だからそんなもの、なのかな。

と、スカーレット家の家庭事情をぼんやりと考えながら、さてどうしようかと妹様を見る。
専属めいどと言われても、何をやればいいのか全く見当がつかない。
「わたしの名前はフランドール。フランドール・スカーレットよ」
「先ほども言いましたが、夜空天満です」
よろしくお願いします。そう頭を下げれば、妹様……フランドール様は思いついたかのように口を開いた。
「天満はこの館で働いているのよね？　どうして？」
「それはですね」
掻い摘んで説明すると、フランドール様は何がおかしいのか大笑いしていた。最初から。家が火事になったところから。
「そ、そんな理由で……！　そんな理由で悪魔の館に……！」
割かし真剣な理由なのだが。おかしなことには変わりないが。
「いやあなた異常ね。感性が人間離れしてるわ。わたしが言えたことではないけど」
そんなはずはない。と、思いたい。
「そういえば、フランドール様はずっとここに？」
「フランでいいわ。長い……付き合いになるのだし。それと、そうよ。わたしは生まれてからずっと地下にいるの」
長いの後に少し間があった。
まぁ、わたしが死ぬまで専属めいどをやったとしても大体あと八十年ほど。人間にとっては長い時間だが、吸血鬼には短いのだろう。
しかし、生まれてから？　何年生きているのか分からないが、寂しくはなかったのだろうか。
この部屋は清潔だし、物にも溢れているが、どこか汚い感じがするのに。
使われなくなった建物。そんな雰囲気がここにはある。
「寂しくなかったかって？」
「はい」

「別に、そうでもないわ。わたしはここに幽閉されているといっても、それは自分から望んでいることでもあるし」
「そうなんですか？」
「そうよ。その気になれば外に出ることなんて容易いもの。それに、何年かに一回はお姉様も会いに来てくれるし、咲夜も来る」
でもそれは、毎日のことではないだろう。
ご主人様がどう思っているかは分からないが、ご主人様の行為は確認だ。何か異常はないかの確認。
……私がそう感じているだけで、本当は違うのだろうけれど。
「幽閉されたって、どうしてです？」
「わたしの気がふれているから」
「……え、えっと、それは」
「少なくとも、そういう理由になっているわ」
そう言うってことは、本当の理由があるのかもしれない。
気がふれている、という理由なら生まれてから少し経ってからじゃないといけない。赤ん坊の頃からしっかりとした自我があるわけでもないだろう。
それに、生まれてからずっとということは、最初の頃は親がいたのだろう。
その親が、何らかの意図を持ってフランドール様を幽閉した、と。
……深く考えるのはよそう。考えたところで何が出来るわけでもない。
自分から望んでいることでもあるようだし。
「……」
「……」
会話がなくなる。話す話題がない。粗方出尽くしてしまった。
「ねぇ」
「はい？」
「天満はさ、一緒にいてくれる？」
「え、ええと。ここで働いているうちは」

予想外の問いかけであったが、正直に答えておく。
まぁ、ここ以外に働くところはないだろう。あるかもしれないが、ここみたいな好待遇はなかなかない。
「そう」
フランドール様は一つ頷き、手招きする。
言うまでもなく、こちらへ来いということだろう。黙ってフランドール様の座るべっどへ向かう。
「なんでしょうか？」
聞くと、強い力で引っ張られ、フランドール様に抱きとめられる形になった。
体格差があるものだから、こちらが寄りかかるような体勢になる。
「あなたの血、吸っていい？」
耳元で囁かれる。
血を吸う。つまり吸血行為。
めいど長が言うには、特に害があるわけではないらしい。始めは痛いし、血液を吸われすぎたら死んでしまうし、吸血鬼になるそうなのだが。
しかし。この館の吸血鬼は少食らしく、同族を増やせるほど、死んでしまうほど吸血を出来るわけではないそうだ。
そのことを思い出しながら頷く。
シュルシュルと胸元のりぼんが解かれ、ぼたんが外されると、首筋から胸元までもが露になる。
自分で言うのもなんだが、肌は白くシミ一つない美しさを誇っている。
美味しそう……。と呟きが聞こえ、首筋を生温かい何かが這う。
舌だ。
「んっ……」
なんともいえぬ感触に思わず身をよじると、背中に手を回され動きを阻害される。
「うふぉいひゃひゃめ」

そんなことを言われる。舌を出しているためか、まともな言葉ではなかったが、おそらく動いちゃ駄目といったのだろう。
今度はあま噛みされる。痛いような、くすぐったいような。そんな感覚に襲われる。
……これを動かないのは、辛い。
できれば早めに終わらないものか。
そんな思いが通じたのか、あま噛みとはまた違った痛みが。くすぐったさはなく、傷つけられる痛み。
そしてそれは次の瞬間、とてつもない激痛に変わった。
「い〝ッ……」
神経を焼き焦がすような熱い痛みに声が漏れる。
血液が外に流れ出すのを感じ、視界がぐらぐらと揺れる。
ゴクリと血液を嚥下する音がやけにハッキリと聞こえた。
それは二度、三度響いた後で止まる。同時に、私の痛みも消えた。
「はぁ……はぁ……」
荒い息を吐きながら、脱力する。してしまう。
全体重をフランドール様に預け、痛みの余韻に浸る。
……疲れた。
それが率直な感想だった。痛かったよりも、辛かったよりも先に出てきたのがそれだった。
もうこのまま瞳を閉じて眠ってしまいたいくらい。というか、瞼が半分閉じかけ、意識も落ちかけていた。
が、首筋にぽたりと落ちてきた液体に意識が覚醒する。
液体は連続で落ちてきて、出所は当然。
「フランドール様……？」
少し力を入れてフランドール様を見ると、ボロボロと大粒の涙を流していた。
顔をくしゃくしゃに歪め、それを隠すように右手で顔を覆う。
慰めた方が……いいのだろうか？
とりあえず背中をさする。声はかけない。かけていいのか分から

ない。
するとフランドール様はこちらに抱きついて、何かを呟きながら、声を押し殺しながら泣き続けた。
呟きは、どうして、という疑問が多かった。

そして冒頭に戻る。
あれから少し時間が経ち、泣きつかれたのかフランドール様は眠っている。
身体を倒してはいるものの、抱きつかれた体勢のままなので抜け出すことができない。
どうしたものか。そう思考を巡らせていると、部屋の扉がコンコン、と控えめにのっくされた。
ギィ、と古い金属製の扉が開かれ、見慣れた紫色が入室する。
パチュリー様だ。
パチュリー様は足音を立てずこちらに歩いてくると、
「妹様に何かあったの？」
と、小さく聞いてきた。
声が小さいのはフランドール様を起こさないためだろう。こちらも、同じように小さな声で説明する。
私の血を吸ったら、急に泣き出したと。
「……そう」
パチュリー様は一言呟くと、フランドール様の腕を解いてくれた。勿論、起こさないようにであるから時間はかかってしまったが。
べっどを抜け出し部屋の隅へ移動。
「カタルシスね。貴女の能力から考えて、それくらいしかないでしょう」
「かたるしす？」
「日常生活におけるストレスなんかで凝り固まった感情を、文学作

品などを読むことによって浄化することよ。４９５年間の寂しさや苛立ち、その他諸々が涙となって溢れ出たんだわ」
やはり、寂しかったのか。よく考えなくとも当然ではある。
生まれてからずっと一人なのだ。寂しくない方がおかしい。
「……あの、フランドール様が幽閉された理由って……」
「私が全て知っているわけでもないし、確証はないのだけど」
そう前置きしてから、ゆっくりと語り始める。
「守るため、じゃないかしら」
「守る？」
「そう。妹様の能力はありとあらゆるものを破壊する能力。……ハッキリいって、破壊に関することなら妹様の右に出るものはいないわ」
でも、とパチュリー様。
「生憎と妹様はその能力を扱いきれていないわ。あらゆるものを破壊する能力の扱い方なんてどう教えればいいのかしら」
分からない。けれど、その能力よりも強い能力を持つ人でないといけないだろう。
でないと、誤って殺されてしまうかもしれない。
「更に言えば、その能力を使いこなせるようになればなるほど、周りは恐怖するでしょうね。人妖関係なしに」
言われてみればそうだ。その能力を使いこなせれば、破壊する対象だって選べるのだから。
「圧倒的力を持ったものに対する行動は、振るわれないようにするか、振るわれる前に倒してしまうか。レミィやその両親は、後者の方を懸念したんでしょうね」
だから、気がふれているとして地下に幽閉した、と。
「妹様は生まれてからずっとここにいるというし、レミィも生まれてからずっと幽閉しているというけれど、まぁ嘘でしょうね。生まれてすぐにどんな能力を持っているかなんて分かるものですか。……まぁ、妹様は覚えていないだけなのかもしれないけど」

やっぱりそうか。
「ま、ただの憶測だけどね。……さて、と。私は上に戻るわ。レミィと話すことがあるし」
「あ、じゃあ私も」
立ち上がったところで、止められた。
「貴女はここにいて、妹様が起きるのを待ってあげなさい。いろいろと時間がかかるだろうから、その間一緒にいて寂しさを埋めてやりなさい」
「はぁ……。了解です」
それじゃあ、と一つ手を振り、パチュリー様は扉に手をかける。
「……何するんです？」
聞くと、パチュリー様はういんくをして、
「やっぱり姉妹は仲がいいに限るでしょう？」
いや全くその通りで。

めいどいずどらんくぶらっど（後書き）

しかしこの話は続かない。ささっと妖々夢に突入しますよー。

あと、これからは約１０ｋｂ書いたら投稿することにします。

めいどめいどろーるきゃべつ

どんよりとした曇り空。
ちらつく雪の中、空には花火のように煌く弾幕があった。
窓越しからでも、その美しさは十二分に伝わってくる。
時折、「どうして連れ出してくれなかったのよ！」「こちらにも事情があったの！」などと、幼い子供の声が聞こえてくる。
どこかの窓が開いているわけでもないのに、館の中にまで響いてくる。
「……元気ねぇ」
と、年寄りっぽく呟いたのは、私の隣で観戦しているパチュリー様。ちなみに咲夜さんは春を探しに行っている。
加えて言うが、今は春である。五月くらい。
なのに春が来ないということは、即ち異変であって、咲夜さんはその解決に乗り出したのだ。
「わたしは！　地下になんていたくなかったのよ！」
と一際大きい叫び声が聞こえ、かなりの弾幕が放たれる。
「これは被弾しそうね」
パチュリー様の言うとおり、これは被弾してしまいそうだ。
相手の動きを阻害しながらも、逃げ道を塞ぎ確実に仕留めようとする弾幕だ。簡単に避けられはしないだろう。
「……っ！　妹に、負ける姉があってなるものですかぁぁぁぁぁぁ！」
負けじと放たれる弾幕。
「……まだまだ続きそうね」
パチュリー様の言うとおりに、これは早々終わる気がしない。
この、第一回スカーレット家姉妹喧嘩は。

言うまでもないが発端はパチュリー様である。
最初はフランドール様とご主人様の対話をさせようと思っていたらしいのだが、……その、パチュリー様の言葉を借りれば、ご主人様がへたれたらしい。
ご主人様も、幽閉には思うところがたくさんあって、今更顔を合わせられないとか、なんとか。
私は基本的にフランドール様の傍にいたものだから、説得の様子を詳しくは知らない。のだが、めいど長までもが説得に加わったというから相当なものだったのだろう。
結果として、厄介払いみたいに異変解決へ向かわされたのだが。
それを知ったパチュリー様が強硬手段。フランドール様とご主人様を外に放り出し、強制的に話し合いをさせたのだ。
そして最終的に始まったのが姉妹喧嘩。最初からこうすればよかったとはパチュリー様談。
「……天満。お腹が空いたわ」
「あ、はい。何か作ってきます」
最近掃除の手間がなくなったために、かなり時間に空きができた。めいど長は以前、二十八時間労働だったそうなのだが、掃除の手間が減って二十二時間労働になったとか。
……びっくりだよねー。どうやったら二十何時間も働けるのだか。
そんなこんなで労働時間が減ったため、めいど長に料理を習うようになった。
少しずつではあるのだが、上手く作れるようになっている、と思う。そしてそれに比例するかのように投げないふが上手くなっている気がする。気のせいだろうか？
気のせい、ということにしておこう。料理と投げないふの腕が比例するなんて、ねぇ？
なんて事を考えつつ厨房に到着。
食材を保管してあるところを見ると、様々な食料が置いてあった。

その中で最初に目についたのは
「……よし。ろーるきゃべつ！」
きゃべつを手に取り掲げる。
人里の農家が丹精込めて育て上げたきゃべつだ。大切に使わせていただこう。
まずはお湯を沸かしながら玉ねぎをみじん切りにし、軽く火にかける。
お湯が沸いたらきゃべつを破らないよう一枚ずつ剥ぎ、沸騰したお湯の中へ。しんなりするまで茹でる。きゃべつの芯を包丁で削いでおくことも忘れない。
その最中暇なので、挽肉に玉ねぎを混ぜ捏ねる。
茹だったきゃべつの真ん中に挽肉を置き、巻き始める。
手前に少し巻き、左の葉を織り込んで最後まで巻く。
最後に右側を肉に押し込み形を整える。
これを幾つか作り、鍋にキッチリと並べ水とすーぷの素を投入。
落し蓋をしてからゆっくりと弱い火にかける。
後は煮込むだけ。
「でもこれだけじゃあ寂しいよね」
というわけでもう一品。
「……鍋行こう」
大き目の鍋を用意し、食材庫から白菜、長ネギ、椎茸含むきのこ類、豚肉やそーせーじとカブと大根を取り出す。
まず大根おろしで大根とカブをおろしていく。もちろん皮はむいてからだ。
これが一番時間がかかる。鍋に必要な量となるとかなり多くなるからなぁ。
三十分ほど時間をかけ、鍋に材料を入れてからおろしたものを投入。ちなみに肉やそーせーじは後回しである。
後は火にかけるだけ、なのだが、鍋物はここでしか食べられない。火がないから。

仕方がないので魔術行使。『火』『吸』『力』『永』『続』『防』と紙に書き、台を用意する。
「ろーるきゃべつもそろそろいい頃かなー？」
見れば、大体食べれるようにはなっている頃だった。
一つ頷き、ろーるきゃべつを皿に移してとれいに乗せる。ついでに鍋と台と紙も。
さぁ、ご飯の時間だ！

「遅い。……何本格的に作ってるのよ。軽い物を期待していたのに」
さんどいっちとか、と呟く声が聞こえたが、聞いていないことにした。
適当な机を用意し、台をせってぃんぐ。その上に鍋を置き、下に紙を置いて霊力を流し込む。
着火に成功した。
「鍋……季節的には間違っていないのだろうけど、予想外だわ」
「いいじゃないですかー。みんなで食べられますし」
「今は二人しかいないけれど」
あー……、と声を上げながら窓の外を覗いてみる。
弾幕を使った格闘戦になっていた。
「……小悪魔と美鈴呼びましょうか」
「そうしましょうか」
パチュリー様の魔法で、鍋をやることを報せる。
美鈴さんは門番の仕事があるのだが……まぁ、今現在館は強力な守護防壁に包まれてるから問題ないだろう。
時折鍋をかき回しながら小悪魔さんと美鈴さんを待つ。
ろーるきゃべつが冷めてしまいそうだが……。仕方のないことか。
しばらくするとコンコンとノックする音が聞こえた。
パチュリー様が返事をし、部屋へ迎え入れる。

「え、えーっと、いいんでしょうか？」
「大丈夫よ。喧嘩を始めたのは二人だから」
美鈴さんが呟く。主人を置いて会食するとは如何なものか、ということらしい。
ちなみに小悪魔さんは鍋をかき回して匂いを堪能している。なんだろう、美鈴さんと小悪魔さんのこの差は。
「大根おろしですか？」
「そうですよー。オススメはポン酢です」
ポンってなんだろうね、ポンって。ポォンッていめーじがあるのはなにゆえか。
ちなみにポン酢なしでも美味しいよ。大根とかカブとかが甘くなってるから。
四人……四人？　で手を合わせていただきます。私はともかく、パチュリー様たちがやるのは意外だよね。
そんなことを考えながら食べ始める。時折小悪魔さんと肉の取り合いをしたり、美鈴さんに野菜を入れられたりした。
「それにしても。よかったわね」
不意に、パチュリー様がそう呟いた。
「何がです？」
「天満よ、天満。妹様に依存されなくてよかったわね」
私？　依存って……。
「どういう意味です？　いや、言葉の意味は分かってますけど」
「カタルシスは通常、ストレスを解消するための手段に過ぎず、起きたとして活力が湧いてくるくらいでしょうね。繰り返すけど、通常では」
「話だけは聞いてますが、そのカタルシスとやらが普通ではなかったと？」
その通りよ、と美鈴さんに頷くパチュリー様。
普通のかたるしすではない……。
「カタルシスは、自らの小ささを実感するということよ。文学作品、

演劇、又は大自然と向き合ったとき。あれに比べれば、自分の悩みはなんて小さいものだったのだろう。自分の抱えている悩みよりも、はるかに大きい問題を自分と同じ人間が解決できたんだ。自分にも出来るはず。そういった思考がカタルシスを引き起こすの」

けれど、と続ける。

「天満が妹様に引き起こしたカタルシスは、いわば無理やりに起こしたものよ。だから、活力を得られない」

「……つまり、通常のカタルシスはマイナスからプラスに向かっていくものだが、天満さんが引き起こしたものはマイナスをゼロにしただけ、ということですか？」

美鈴さんの言葉に頷き、尚も言葉を続ける。

「寂しさ、怒り、憎しみ、諦め。他にもたくさんあったでしょうけれど、妹様はそれらに囚われていたんでしょうね。そして、４００年以上の歳月をかけ、凝り固まって行った結果がつい最近までの妹様。けれど、カタルシスによってそれらはほぼなくなったと見ていいわ」

「じゃあ、なんで私への依存に繋がるんです？」

「なくなったのは凝り固まって雁字搦めになったものだけよ。妹様自身の感情がなくなったわけではないし、凝り固まったものがなくなったからこそ、感情の発露は激しくなるわ」

ん、んぅ……。

「つまり？」

「トラウマを持った者は、トラウマが再現されることを拒むわ。そういうことよ」

分かったような、分からないような。

「一人だった妹様は、一人になることを拒んだというわけですね」

ああ、なるほど。そういうことか。

でも、だからって私に依存することはないと思うのだが……。はて。

疑問に思ったものの、食事中にする話ではないわね、とパチュリ

ー様が呟かれたので口を噤む。
「……。小悪魔、貴方食べすぎよ」
「小難しい話をするのは嫌いですよー」
だから今まで話に入ってこなかった模様。
にしたって、食べすぎな気がする。半分くらいまで減ってしまっている。
「私の食べる分が少ないじゃないの」
「食べない方が悪いんですよぅ」
全く以ってその通り。というわけで皿の中に肉には手をつけていないみたいだから貰っていこう。

姉妹喧嘩が終わったのはなんと日が暮れてから。
めいど長が異変解決から帰ってきたくらいに、両者のっくだうんで終結となった。
でもまぁ、両方ともいい笑顔で気を失ってたから落としどころは見つけたんだろう。
これで姉妹仲がよくなれば万々歳なのだが……。
「神社の裏でお花見が開かれるのですけど、今日は無理みたいですね……」
「どうせ明日になったら何食わぬ顔で出席するわよ。吸血鬼なんだし」
神社、というと博麗神社だろうか。あの寂れた神社。
「で、異変の原因はなんだったの？」
「桜を咲かせることですわ」
「桜？」
「封印された桜だとか」
桜を封印するなんて何事だろう。綺麗なのに。
めいど長とパチュリー様の会話を聞いていると、唐突に箱が渡さ

れた。
白くて、紅いりぼんが結ばれている。
「えっと……？」
「伝言よ。『遅くなったが誕生日プレゼントだ。大切にしてくれよ』、だそうよ」
むぅ。……直接渡してくれればいいのに……。
「もしかして」
「ええ。彼女も人里出身ですもの。接点はたくさんありますわ」
「……黒白の友人は紅白だけかと思っていたけれど」
「曰く、『友人は天満だけ。霊夢はライバル。お前らは知り合いだ』らしいですよ？」
「意外ね。私たちはともかく」
今度、お礼に行きますかね。

めいどめいどろーるきゃべつ（後書き）

大根とカブのおろし鍋はオススメですよー。
まぁ、作り方をしっかりと書いているわけではないので、気になる方はググりましょう。

まくま（前書き）

兼重大発表

まくま

パチュリー・ノーレッジは突然の来客に驚きを隠せずにいた。
来客というのは少々おかしいかもしれない。何故ならその人物は、虚空から現れたのだから。
来客というより、侵入者である。
「おいおい。そんなに警戒しないでくれよ。埃が舞って喘息が出るぜ？」
「……お生憎様、この館に埃は存在しないわ」
その他汚れなども。
「へぇ。天満ちゃんはそこまで上達したのか。感心感心」
出てくるとは思わなかった天満の名に、もう一度驚く。
天満の知り合いだからといって警戒を緩めるわけではないが。
「……天満の知り合いかしら？」
「今のでそのことが予測できないのだとしたら君は相当な馬鹿ということになるね？」
ロイヤルフレアを放ってやろうかと、一瞬本気で思った。サイレントセレナでもいいかもしれない。
「そんな剣呑な表情をするなよ。せっかく説明に来たっていうのに」
「説明？」
「疑問に思っているのだろう？　天満ちゃんのこと。天満ちゃんが説明するのならそれでいいかと思っていたんだけれど……説明する気がなさそうだしねぇ」
と、そこでパチンッと指を鳴らした。すると、虚空より椅子とテーブル、おまけにティーポットと茶菓子が現れた。
かけなよ、と侵入者は言い、パチュリーは数瞬逡巡した後、自前の椅子を用意した。
侵入者はそこまで警戒するかと言いたげだったが、何も言わずに語り始めた。

「最初に生い立ちから説明しようか。夜空天満という人間は、ぼくが作った」
「……はぁ？」
そこからは驚きの連続だ。
侵入者の説明することはありえないと言えるものばかりで、しかし納得できるものだった。
にわかには信じがたいのだが。というより、信じるに値する信用がないのだけれど。
「――というわけだ。精々優しくしてやってくれ。天満ちゃんは無知だけど、可愛い子だから。少し優しくしてあげればコロッと落ちる」
「……どういう意味かしら？」
「いやぁ？　個人的な考えだけど、百合の花はたくさん咲いた方がいいだろう？　白ければなおいい」
今度は本当にロイヤルフレアを放った。
しかしひょいひょいと軽く避けられ、苛立ちは募るばかり。
「そうそう。ぼくが天満を作ったって言うのは秘密にしておいてくれよ。天満はそこらへん、知らないんだ」
「何故、そんなことを。というより、何故説明に来たの？」
パチュリーが問うと、侵入者は表情を消し、
「面倒になったんだよ。先を考えるのが。未来を見据えるのが。劇的な事件なんていらない。全ては本筋どおりに。我が子には日常を平和に謳歌してほしい。言ってしまえば、ただの心変わりだよ」
それに、と侵入者は続ける。
「説明しているのは、何も君だけにじゃあないさ。今までの伏線は放り投げますよって、第三者にね」
パチュリーは首をかしげる。読者って何？
「……意味が分からないのなら、それでいいさ。というより、分かってもらっては困る」
「……貴女は、いったい何なの？」

そんな言葉が口をついていた。
不明瞭な物言いに、完全な人間の創造。能力の付加。どれも規格外のことだ。
「ただの親さ。歪んだ世界を作り、特異な人間を生み出した、一介の想像者」
そこで姿を消す侵入者。
最後まで、意味不明だった。
「ああそうそう。このことを知っているのは君を含めて三人だ。気になったなら探してみるといい」
「立ち去ったと思ったら戻ってくるのは止めてくれないかしら」
色々と台無しである。
「台無し、ね。そもそもぼくがこうして出張ってきている時点で物語としては破綻しているさ。あとは、なるようになるだけ。安心しな。本筋から外れることはない。イレギュラーは発生しない。伏線は放り投げられ、全ては結果的に同じになる。それじゃあ、愛と葛藤で美しい百合畑を作ってくれることを期待しているよ」
賢者の石で全力攻撃。
当たるわけがないが、しかしこういうのは気分の問題である。
「はぁ……」
ため息を一つこぼし、パチュリーは自己嫌悪に陥る。
無抵抗のものに何をやっているんだか。いくらムカつくことを言われたといっても、アレではただの暴力女ではないか。
「……お茶でも飲んで落ち着きましょうかね」
誰に向けてでもなく言い放ち、小悪魔を使って天満にお茶を持ってこさせる。
なんだか、策略に嵌っている。そんな気がしないでもないパチュリーだった。

まくま（後書き）

重大発表。

というのも、今後のこの作品について。

この作品は作者の自己満足であり、目的もない作品です。

が、しかし。感想を貰っておいてそれはどうなのよ、と異変終了まで書いた頃に思い、一日ほど悩みました。

悩んだ結果、自己満足であることには変わりないですが、目的だけは決めました。

それが作中でも出てきたように百合の花畑を作ろうぜ！

というもの。要するに天満の百合ハーレムということ。

同性愛に対する葛藤とか、それを超えたときの愛とか、肉体関係から始まる濃いとかを、精一杯表現していくつもりです。

ですが、作者は未熟ゆえに至らないところもたくさんあります。

今回の目的を決めたときに、今までの伏線を放り投げたことや、そもそもの技能不足（文章を書く上での）などなど。

なので、批判批評などしていただけると嬉しいです。

ちなみに、ハーレムとは言いましたがハーレムエンドになることだけは絶対にないです。天満は誰かを選びます。選ばないかもしれませんが。

では、今後ともよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6226w/

紅い館の〇〇メイド

2011年9月24日20時49分発行